北タイ（ラーンナー王国）で作られた東南アジア独自の仏教説話

――“*Paṭhamamūlamūlī*：（世界）始源の物語”――

清　水　洋　平

ラーンナー王国とは、北タイに住するラワ族族長の息子マンラーイが、現在の北タイ・ラムプーンに位置したハリプンチャイ国[1]を滅ぼし、1296年頃に新しくチェンマイに都を置いて王国を創建したことに始まる。以降、1558年にビルマ軍によって同地が属領とされるまでの間[2]、ラーンナー王国では歴代の王の厚い庇護を受けたテーラヴァーダ仏教が栄え、タイ北部に一大仏教文化が花開いた。

14世紀後半から16世紀前半までのこの200年間、ラーンナー王国では王権と僧伽が協歩協調してテーラヴァーダ仏教の良き時代を演出した。歴史上名高い第９代の王ティローカ（Tilokarāja：在位1441/42～1487）のとき、王権・僧伽の関係は最高頂に達し王国は繁栄した。その版図は、西はビルマ・シャン州から東はラオス・ルアンパバーンに広がったという。

ティローカは、北部タイの統一者であった。また仏教の守護に努めた王であった。それは次の11代ムアン・ケーオ王（Mu'ang Kaew：在位1495～1525[3]）の時代に、タイにおける仏教学問の黄金期を迎える基盤を作り上げた。ムアン・ケー

---

1 ‘ハリプンジャヤ’とも呼ばれる。７世紀後半頃、現在のラムプーンの地に住した聖者ヴァースデーヴァが同地に町を起こし、モン族の国ラヴァプラ（現ロッブリー）から国王の娘チャーマデーヴィー王女をハリプンジャヤ（現ラムプーン）に招いて統治者となし、ハリプンジャヤ国を創設したと年代記（*Cāmadevīvaṃsa* や *Jinakālamālinī* など）は伝えている。

2 ラーンナー王国はその後1781/82年にカーウィラ王によって主権を回復し、1939年まで存続した。のち、現ラタナーコーシン朝に併合された。タイ系民族の盆地連合国家であり、その文化は広範囲に影響を及ぼした。

3 ‘ケーオ’、‘パヤーケーオ’などとも呼称される。

オは仏教の庇護を継続し拡大した。ムアン・ケーオの時代はラーンナー王国の力と僧伽の名声が最高のときであった。それは統合され和合した比丘僧伽を生み出し、多数の学者集団を輩出し、数多くの勝れた注釈書、年代記、論書がこの時代に生まれた。[4]

＊＊＊

今から100年ほど前にタイ王室から贈られたとされるパーリ語貝葉写本[5]の一大コレクション（大谷貝葉）が、大谷大学図書館に存在することは著名である。[6]その中の１つに東南アジア独自の仏教説話である *Paññāsajātaka*（50のジャータカ）が含まれていた。このことが真宗総合研究所での大谷貝葉を活用した研究の端緒を開いたと見ることが出来る。[7] *Paññāsajātaka* は、東南アジア大陸部：ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジアなどに流布する仏教説話の集成である。[8]これらの説話がジャータカ形式（現在物語・過去物語・人物の結合）を厳格に踏襲し

4　*Cāmadevīvaṃsa*: by Bodhirańsī Thera、*Sihiṅganidāna*: by Bodhirańsī Thera、*Samantapāsādikā-atthayojanā*（*Samantapāsādikā* written at the end of 15th century）: by Ñāṇakitti Thera、*Vessantaradīpanī*: by Ācariya Sirimaṅgala in 1517、*Maṅgalatthadīpanī*: by Ācariya Sirimaṅgala in 1524、*Jinakālamālinī*: by Ratanapaññā Thera in 1517、*Paññāsajātaka* など。

5　貝葉とは、「貝多羅葉」の略称であり、サンスクリット語である 'pattra'（パッタラ：葉）と、主に用いられたパルミラヤシである 'tāla'（ターラ：多羅樹）を漢訳したものを起源とする。このターラ椰子の葉を蒸して乾燥させたものに、鉄筆で刻字されたものが貝葉写本である。原材料は地域や植生によって様々な材料が用いられる。タイでは、貝葉をバイ・ラーン（ラーン（タリポットヤシ）の葉）と呼称する。

6　その所蔵量は国内最大級であり、内外に誇る一大コレクションである。1985年に桜部建教授（当時）が総務委員となり大谷貝葉の目録編纂事業が開始され、内外の多くの研究者の協力のもと10年の歳月をかけて、大谷大学図書館編『大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録』（1995年）として、目録の出版がなされた。

7　2008年度に大谷大学真宗総合研究所では「指定研究：大谷大学 DB 研究（チーフ：宮下晴輝教授）」へ大谷貝葉に関わる研究計画が移された。それは、長年の問題の１つであった「大谷貝葉コレクションについて、一般者が利用可能なデジタル化された画像データ資料がない」という状況に対して解決を図るためでもあった。現在、大谷大学 DB 研究では、今までに稀覯文献と判明しているものを中心に大谷貝葉のデジタル画像データ化の作業を進めている。

ていることから、擬経ジャータカ（Apocryphal Jātaka）と呼ばれることもある。[9] これらは、テーラヴァーダ仏教に伝承された547話からなる所謂「500ジャータカ」とは別種のものである。このパーリ語で書かれた *Paññāsajātaka* は、ビルマ文字、クメール文字、ラーンナー文字、モン文字などの東南アジア各地の文字で貝葉に刻まれ、各地の寺院で保存され、大切に伝承されてきたのであった。

Paññāsajātaka 研究の一環として、[10] 2004年８月通算で３回目にあたるが、機会を得てタイ国を訪ね、此の回は北タイ・チェンマイの地に赴き、チェンマイ大学およびフランス極東学院（École Française d'Extrême-Orient）チェンマイ支部

8　*Paññāsajātaka* の起源および年代については、ダムロン王子（Prince Damrong Rajanubhab）がタイ訳初版本（1925～）の序文で述べている―これらの物語はラーンナータイ古代王国の首都であった北タイのチェンマイに住んでいた僧たちによって集められ、整えられ、パーリ語で書かれたもので、編纂の時期は15世紀から17世紀半ばである―とするものが大方の学者から支持されている。

9　*Apocryphal Birth-Srories (Paññāsa-Jātaka) I, II,* translated by I. B. Horner and P. S. Jaini, The Pali Text Society, London, 1985, 1986. [P. S. Jaini が、*Zimme Paṅṅāsa* と称されるビルマ版を PTS から校訂出版（1981）したローマ字パーリ語テクストの英訳版]

10　長崎法潤・吉元信行両教授（当時）が中心となり、大谷貝葉の中の稀覯文献についての研究が継続され、特に、東南アジア独自に展開したジャータカである *Paññāsajātaka* について、大谷大学真宗総合研究所が中心となり研究が始められた。その後、*Paññāsajātaka* 研究は、大谷大学真宗総合研究所パーリ語文献研究の休止に伴い規模は縮小するが、日本学術振興会科学研究費などの補助を通じ、10年以上に亘り継続的に研究が進められ、大乗経典との関係が明らかになりつつあるなど、現在も国内外の多くの研究者が参加する共同研究として発展し続けている。総合的な研究成果として次の報告書がある。①『大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本における *Paññāsajātaka* の文献的研究』（平成10年度～平成12年度科学研究費補助金（基盤研究（B2））研究成果報告書：研究代表者　吉元信行（大谷大学教授））、2001. ②『大谷大学所蔵貝葉写本 *Paññāsajātaka* と他伝承の同名本との比較研究』（平成13年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究（C2））研究成果報告書：研究代表者　田辺和子（東方研究会研究員））、2004. ③『タイ所伝 *Paññāsajātaka* の校訂、翻訳と思想研究』（平成16～18年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書：研究代表者　茨田通俊（東方研究会研究員））、2007. ④『パーリ語およびタイ語写本による東南アジア撰述仏典の研究』（平成17年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書：研究代表者　畝部俊也（名古屋大学大学院文学研究科准教授））、2008. など。

の研究者と会い、北タイに流布する仏教説話に関し種々の意見を聴取した。また、現地に出向いたことから、関係する研究文献や原典写真資料などを手にすることが出来た。中でも、フランス極東学院の Anatole-Roger Peltier 氏(当時)と面談の機会を得たことは貴重であった。[11]

Peltier 氏は、著書の経歴欄が語るところによれば、ラオスの吟遊詩人たちの中で育ち、パリ・ソルボンヌ大学で極東学博士号（Docteur en Etudes Extrême-Orientales）および人文科学国家博士号（Docteur d' Etat ès Lettres et Sciences Humaines）を受けた後、タイ言語および文化を研究分野とし、フランス極東学院チェンマイ支部の研究メンバーとして、北タイ地域に居住するタイ族（シャン、クーン、ユアン、ルーなど）の古典文学を研究しておられる。前述のとおり同地域は14世紀から16世紀にかけて仏教文化が栄え独自の物語文学が花開いた歴史を有しており、研究の成果は、それら民族文学を現地語・中央タイ語・フランス語・英語を併記した編纂を行い、公刊して広く世界に開示されることに努めておられる。

＊＊＊

本稿では、同氏より寄贈を受けた研究著作の一つである“*Paṭhamamūlamūlī*：（世界）始源の物語”を紹介し、元々はラーンナー語で記された物語本体を同氏が英訳されたものに依りその和訳を掲載することとした。この未知の東南アジア撰述仏教文献を通して、同地域における仏教受容の実際について味読したいと思う。

Paṭhamamūlamūlī は、北タイの主要民族であるタイ・ユアンに広く膾炙している世界創造物語である。ただ、口承を主体として継承され、民族に深く根ざした人々が共有する神話と、およそ13世紀から14世紀にかけて入って来たであろう書写された経典を読むことから得られる仏教教理、その二者が原作者のイマジネーションの中で融合した結果、実に不思議な世界創造の物語に変身していることに本物語の一大特徴がある。原理として仏教教義に宇宙生成論は存在しないとはいえ、[12] ある意味で民族のアイデンティティーの象徴ともいえる固有

11　詳しくは、拙論「北タイの仏教説話―タイ国所伝 *Paññāsajātaka* 調査報告並びに関係する仏教説話紹介」『佛教學セミナー』81, 2005 参照。

の神話と、異文化である仏教の教えがどのように融合し、かつ受容されて行くかを知る上で甚だ興味深い存在である。Peltier氏が原文のラーンナー文字をまず中央タイ文字に忠実に転換し、タイ国の人々が近縁語（方言）として読みうる形にしたうえ、加えて外国人のため、仏訳・英訳を添えた本書は貴重である。

物語は3章に分かれている。第1章は、Aññāta　Koṇḍaññaに仏陀がこの *Paṭhamamūlamūlī*［始源の物語］の教説を語るところから始まる。まず *Nang Itthang Gaiya Sangkasi* と *Pu Sangaiya Sangkasi* と呼ばれる女性原理と男性原理の存在［Being］が世界を創ったことを述べ、大地や生き物や人間がどのようにして生じたかを説き、また季節や時間、黄道の十二宮や十二支がどのように出来たかを語り、民族固有の神話物語が色濃く残る章である。第2章は、生まれた人間がその後どのようにして少しずつ物事を知り分けて行ったかを述べ、無数の阿僧祇劫を経巡って後、ようやく善悪・苦楽の別、世の無常等などを学ぶ姿が描かれ、仏教色が加わってくる。第3章は、ある男の何阿僧祇にも渡る輪廻転生を描き、彼が徐々に世俗からの出離へと進む過程が仏教の教理を織り交ぜて説かれ、ついに悟りを開くに到るまでが語られる。おそらく僧であったろうと思われる原作者は、このようにして民族が伝える世界創造の神話と「苦の滅」という仏教教理の2つの考えを見事に融和し、万物の起源に関する全く新しい物語を著わすことに成功したのである。[13]

今回、紹介する *Paṭhamamūlamūlī*（*Paṭhamamūlamūlī*, Chiang Mai : Suriwong Book Centre Limited, 1991）は、Peltier氏が真宗総合研究所に寄贈された複数の著作[14]の中の1つである。同書は、貝葉写本でのみ存在する16世紀初頃北タイ（ラーンナー王国）で作られたと考えられる東南アジア独自の仏教説話である。元々

12　仏教聖典の中で、人間世界の創世神話が記されている伝統的な文献は幾つかある。その中で最もよく知られているものは、パーリ三蔵のうち、Dīgha Nikāya の第27番目に所収されている *Aggaññasutta* であろう。他に、犢子正量部の聖典伝承とされる *Lokapaññatti* や『立世阿毘曇論』（『大正』32, 173*a*）、東インドの正量部に所属する仏教詩人サルヴァラクシタ（Sarvarakṣita）よって12世紀に書かれた *Mahāsaṃvartanīkathā* など、幾つかの文献中に、人間世界の創世神話が記述されている。

13　物語は、民族の様々な伝承や仏典に淵源のある挿話が織り合わされている。その源を尋ねることは、当時の人々の文化交流の実際を知る手がかりともなろう。今後の研究課題の1つである。

はラムプーン県に所在する寺院ワット・ポンチャイ所蔵写本からのものであったが、現在はチェンマイ県にある寺院ワット・プワクホンに写本は所蔵されている。[15] ラーンナー文字で刻された貝葉写本から、その原文の活字版並びに中央タイ文字への翻字版、併せてフランス語および英語訳文を載せて出版したものである。（今回、英語訳文を著者の了解を得て和訳した。英語訳文中のパーリ語表記は、原表記をそのままに転載した。尚、本稿は、村西弘行氏（大谷大学大学院博士後期課程修了：博士（文学））との共同執筆であることを付記します。）

＊＊＊

Paṭhamamūlamūlī：本文［和訳］

第１章

〈帰依文：namo tass'atthu

tividhaṃ sabbaññūtañāṇaṃ namasitvā ca

dasabalaṃ guṇa-anantaṃ dānapāramiṃ namasitvā taṃ-paṇidhibhāvo

visuddhamattabhūto siddhilakkhaṇaṃ tilokanāthaṃ varam-uttamaṃ〉

かの尊者に帰依します。

一切知智者たる三仏を礼拝します。

十力を持ち、無量の徳を備え、布施波羅蜜を完成されたお方を礼拝します。

仏となる願いを起こした比類なき清浄のお方は、悟りを開かれて三界の最高最上の師となられた。

おお、敬信なる者たちよ。大いなる師、かの Paṭhamamūlamūlī（始源の物語）なる経典を再び世に示された大いなる師は、［過去の］仏を敬われて言われた：

14　［被寄贈図書］① Anatole-Roger Peltier, *Tai Khoeun Literature*, Editions Duang Kamol, Bangkok, 1987. ② Anatole-Roger Peltier, *Paṭhamamūlamūlī,* Suriwong Book Centre Limited, 1991. ③ Anatole-Roger Peltier, *Sujavaṇṇa,* Ming Muang Publisher, Chiang Mai, First Edition 2000 (Publié à l'occasion de l'offrande du Cullakaṭhina Monastère du Wat Tha Kradas 14 novemble 1993). ④Anatole-Roger Peltier, *The White Nightjar* (*Lao Tale*), Mingmuang Nawarat Printing, Chiang Mai, 1999. 梗概は、前掲拙論を参照。

15　同書序文の記載による。

「私は三仏の家族に礼拝します」と。最初の仏は、Paññādhikaと呼ばれた。この家族の仏の芽（[Buddhaṅkura]）が仏とならんと誓ったときより、4阿僧祇10万劫の間、波羅蜜を行じて仏の位に達した。2番目の仏は、Saddhādhikaと呼ばれた。この家族の仏の芽が仏とならんと誓ったときより、8阿僧祇10万劫の間、波羅蜜を行じて仏の位に達した。3番目の仏は、Viriyādhika と呼ばれた。この家族の仏の芽が仏とならんと誓ったときより、12阿僧祇10万劫の間、波羅蜜を行じて仏の位に達した。

これら3つの家族に生を受けた仏は、誕生のとき、それぞれが清らかで輝いておられた。十力（Dasabala）を完全に備えられ、輪廻転生から有情を抜けださしむる三世界の帰依所であられた。仏になるとの願いを口にされてより一切智者となり涅槃に達せられた全福者（the Blessed One）の比類なき功徳に、私は、私の「身・口・意」を挙げて、恭礼します。

私はあなた方に、Paṭhamamūlamūlī（始源の物語）を語ることにしよう。過ぎ去りし時、あらゆる阿羅漢に先立って出世間を得た弟子 Aññāta Koṇḍañña のために、仏陀が授けられた説法：Paṭhamamūlamūlī（始源の物語）を語ることにしよう。

仏陀は、ヴェッサンタラ王子としての地上での生活を成就されて後、私たちによく知られた高貴の菩薩は、再び、兜率天に生を受け、4,000年の天の寿命を過ごされた。その後、地上に降りてこられ、鶏の年、第8月の満月、月曜日の明け方近く、王妃 Srī Mahāmāyā の胎宮に転生された。懐妊10ヶ月を経て、犬の年、第6月の満月、火曜日の朝、高貴の菩薩は母の胎宮から誕生された。仏陀の誕生を指し示す第11番の星座は、Phalguna と呼ばれた。高貴の菩薩は成育されて、御年29歳のとき、遊行の苦行者となられた。6年の苦行の後、一切智に達せられて、無上士、応供、世間解［である仏陀］となられた。宝座から、仏陀は、人々に向かい Dhamma（法）を説かれた。

仏陀の説法を聞いて、釈迦族の人々はお互いに語り合って、そして言った：「Siddhattha 王子•沙門 Gotama の教説は何も深遠でも稀有でもない。言うことは普段の生活に見る普通のことだけではないか」と。

これら貴公子たちの考えを読み取り、自分の教説を彼らが軽んずることを防ぐために、仏陀は説法をサンスクリットで与えた。それより以来、仏教徒の教えのすべてがサンスクリットで組まれた書物に記録されることとなり、誰もそ

れを理解することが出来なくなった。良家の若者たちの中で仏陀の教説に信を置く者たちは、それを学ぶ場をなくした。

その折柄、Sattapaṇṇiguhā の洞窟に住み、仏陀の本当の考えを弁えていた沙門 Kaccāyana は、良家の若者たちに聖典の学び方を指導することとした。良家の若者たちは、沙門の住いに出かけ、各自の理解力に応じて仏陀の教えを身に着けた。

沙門 Aññāta Koṇḍañña は、沙門 Kaccāyana によって良家の若者たちに与えられる解説を聞いて驚き、Veḷuvana の僧院に赴き、所定の場に立ち、握った両手を額に掲げ、仏陀を拝して、告げた。「尊師よ。沙門 Kaccāyana が良家の若者たちに Dhamma を教え、言葉の語根と性を解説しています。彼はまた、ye adi dhamma で始まる Dhamma を彼らに説明しています。その上、母音 i または ī、u または ū は、子音 p と結ばれて女性の性を決定する。母音 ā について、それが子音 gh と結びついて女性の性を決める。沙門 Kaccāyana によって教えられる Dhamma は、稀有のことです。どこで彼は、古の Dhamma の伝承を得たのでしょうか。尊師よ、どうか私たちに教えてください」と。

沙門 Aññāta Koṇḍañña の言葉を聞いて、仏陀は言われた：「Koṇḍañña よ、伝承の Dhamma は、現在、われわれの知性では得ることは出来ない。それは、Paṭhamamūlamūlī を初めて説法された最初の仏である Tikkhadhamma 仏の時代まで遡る。その伝承は、その後に続いたすべての仏に承継されたのだ」と。この言葉と共に、仏陀は沈黙に入られた。

沙門 Koṇḍañña は、仏陀に懇願した。「おお、世尊よ。もし、これが伝承の Dhamma であるならば、どうぞ私たちに教えてください」と。

そこで、仏陀はこの Mūlamūlī の偈(Gāthā)を述べられた。おお、Koṇḍañña よ。世界を創る最初の意志(Cetanā-loka)が始源の意志である。最初に現れた世界（Loka）が始源の世界である。最初に現れた物質（Bhabba）が始源の物質である。最初に現れた生き物（Bhūtarūpa）が始源の生き物である。最初に従われた伝承(作持：Cāritta)が始源の伝承である。最初に完成された功徳(善業：Kusala)は Kusaladhamma と呼ばれる。最初に作られた符号（Kalaṅka）は始源の符号である。最初に現れた助縁（Dhamma paccayo）が始源の助縁である。最初に現れた縁起生の命(Bhāva-paccaya-mūlo)が始源の命である。縁起による輪廻転生（Saṃsāra)が命の渦である。命は様々の存在レベルに―特別であろうと通常で

あろうと一条件付けられる。世界のすべてに始源がある。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。世界がまだ存在していなかったとき、そこには神々（Devatā）も帝釈天（[Indra]）も梵天（[Brahma]）も、動物も土も水も火も木も這う植物も無かった。そこには空気以外は何も無かった。そのとき、２つの要素、［即ち］寒さと暑さが優勢であった。（２つが）出会い、互いを感知して、（２つは)風を起こし、風は非常に激しく止むことなく吹き、幅940,000由旬の固い物質を生み出した。この固い物質から、液質が広がり、伝播し840,000由旬のスペースを覆い、凝縮した。火は、凝縮した物質を焼き、大地（Dharaṇī）を生み出した。水は、大地と触れて露と霞を生み出し、霧と雨が降り始めた。火は、大地の層（Medanī）を凝固させ、それは140,000由旬の層を覆った。大地の層は岩盤に支えられ、岩石を作り、岩石の属性に従い、鉄鉱石、鋼鉄石、金鉱石、宝石の原石になった。同じ時に、光り輝く物質が原石となって現れ出た。４つの物質(Bhabba)が存在するようになったとき、岩石と金鉱石と銀鉱石から出てきた粘質が苔と海藻を生み出した。この植物から、‘Gecko’ 草（*Salaginellaceae*）と ‘Mouse whiskers’ が繁茂し、‘Mouse whiskers’ は、順次、這う植物を、次に多数の樹木を生み出した。それらは最初は叢をなし、続いて群生した。

［仏陀は続けられた］：おお、Koṇḍañña よ。その時、意志の力（Cetanā）により、４つの要素で構成された多数の存在が生まれた。地の要素で生まれたものの中に、イモ虫や毛虫がいた。風の要素で生まれたものは、非常に多くて、その中に、砂と土を引っ掻いて掘り出す昆虫がいた。火の要素で生まれたものは、蚋や甲虫となった。蚤は、水の要素で生まれたものの仲間である。これらの存在は、意識（Citta-viññāṇa）はあったが思考（Mano-viññāṇa）は与えられていなかった。彼らは死を怖がらなかった。彼らは、死滅し、また止むことなく再生した。１阿僧祇が経って、はじめて死を恐れる生き物となって再生した。彼らはこのようにして、もう１阿僧祇の間、生まれて、また死んだ。彼らはそののち、骨と血を貰ったが、非常に小さい生き物として再生した。彼らの血の量は、イチジクの汁に見られる量に等しく、骨は、麦わら帽子ほどの大きさであった。血を貰った生き物のいずれもまだ泳ぐことを知らなかった。彼らは長い間、死んでまた生まれたが、月や年を、まして劫を数えることは出来なかった。それらはまだ実在していなかった。仏の開悟のお蔭で、期間は１阿僧祇続

いたと数えられるようになった。

［仏陀は続けられた］：おお、Koṇḍaññaよ。その時、*Nang Itthang Gaiya Sangkasi* という名前の女性の存在が、土の要素から生まれた。この存在が世界を形作ったのである。彼女は花の香りだけを食べ物とした。その間、植物は繁茂し、大地を完全に埋め尽くした。巨木があちこちに育ち、心地よく感ずることは難しくなった。*Nang Itthang Gaiya Sangkasi* は、一人呟いた：「安息する場を見つけることが出来ないわ。２種類の生き物を作って、この雑草や樹木を食べさせれば、草木は少し疎らになるかもしれない」と。

この考えに従い、彼女は、自分の汗と粘土を混ぜ合わせて、２匹の鼠、２匹の牡牛、２匹の虎、２匹の野牛、２匹の蛇、２匹の竜（Nāga）、２羽の金鶏鳥（Garuḍa）、２匹の馬、２匹の象、２匹の羊、２匹の猿、２匹の雉、２匹の獅子等などあらゆる種類の水中や陸上に住む動物を、それぞれに雌雄の一対を作った。彼女は、粘土の像をそこここに並べて置いた。そのとき、魂がそれら１つ１つに入り込み、その像の内部で霊に変化し、進化し、形作られた動物の形を採ることとなった。*Nang Itthang Gaiya Sangkasi* は、そこでそれぞれの動物に名前を付けた。［即ち］鼠は *Chai*、牡牛は *Pao*、虎は *Yi*、兎は *Hmao*、竜は *Si*、蛇は *Sai*、馬は *Sa-Nga*、羊は *Met*、猿は *San*、雄鶏は *Rao*、犬は *Set*、象は *Gai* と呼ばれた。これらの動物は、世界（Loka）が生まれる前にまさに存在した。

［仏陀は続けられた］：おお、Koṇḍaññaよ。*Nang Itthang Gaiya Sangkasi* は、動物たちが動き回るのを眺めていた。彼女は、動物たちが彼らの餌を食べるのを見て、'*Tao*'（食べる）と言った。彼らが好む食物を手に入れるのを見て、'*Ka*'（得る）と言った。彼らの口元から何かが落ちるのを見て、'*Kap*'（落ちる）と言った。彼らが子を産むのを見て、'*Dap*'（産む）と言った。彼らが落ちるのを見て、'*Ruay*'（下へ）と言った。彼らが眠るのを見て、'*Meung*'（眠る）と言った。彼らが起きるのを見て、'*Peuk*'（起きる）と言った。彼らが近づくのを見て、'*Kat*'（来る）と言った。彼らが去るのを見て、'*Kot*'（行く）と言った。彼らが餌を手に入れるのを見て、'*Ruang*'（獲る）と言った。'*Tao-chai*' という言葉は、鼠が餌を食べたと言う意味である。これらすべての言葉はまさに仏が生まれられる前からあった。仏教徒の伝承によれば、まさに最初の仏が出現したときに、初めて鼠を呼ぶのに 'Mūsika' という［パーリ］語が用いられたのであ

る。

［仏陀は続けられた］：おお、Koṇḍañña よ。そのときより、陸や水に住む動物の数は90,000倶胝（Koṭi）種に達し、各々の種は百、千、万、十万の子孫を持った。これらの動物は、草や葉っぱを食べて、［そのため］それらは生え変わることもままならず、疎らになり始めた。*Nang Itthang Gaiya Sangkasi* は、動物がすべての草木や花や果実を食べるので、彼女を養う花の香りを見つけることが出来なくなった。彼女はそのとき呟いた：「私は、水中に住む100,000倶胝（Koṭi）種の動物と陸上に住む90,000倶胝（Koṭi）種の動物を作っただけなのにどうしてそんなに多く生まれ変わるのかしら」と。4つの要素から作られた生き物が余りに多数となり、彼らは止まることなく死んでは生まれ変わっていることを知って、*Nang* は自らに問うた：「私はどうすべきなのかしら。一度死んだこれらの生き物たちが二度と生まれてこなくするには」と。彼女はこの問いをしばしば問うた。

［仏陀は続けられた］：おお、Koṇḍañña よ。*Nang Itthang Gaiya Sangkasi* は、あれこれと長い間考えた。しかし年も月も日も数えることが出来なかった。というのも、当時は時の単位が無かったのである。仏の最高の智慧のお蔭で、熟考した時間は84,000劫続いたと言える。*Nang* は、自らにこの問いを発したが答えを見つけることは出来なかった。

［仏陀は続けられた］：おお、Koṇḍañña よ。このとき、火の要素から生まれた *Pu Sangaiya Sangkasi* という名前の男性が、これらの動物が動き回り、愛を交わしているのを眺めて、このような想いを起こした：「これらの動物たちは互いに楽しみあっている。私は生きており、快楽を私に与えてくれる器官を持つからには、この快楽を成就することが出来るであろう」と。この考えを携えて、男は歩き続け、*Nang Itthang Gaiya Sangkasi* に出会った。彼は、彼女を自分の妻にしようと思って彼女のもとに出向いた。女は男に近づいて訊ねた。「私に何をしようと思っているのですか」「私はあなたを妻にしたいのです」「もしあなたが私と結婚したいのであれば、最初に謎を解く手伝いをして下さい。もし成功するなら妻となりましょう。そうでなければ、妻とはなりません」「どのような謎なのか。女よ、早く言ってくれ。私はそれをよく考えることにしよう」「おお、すぐれた人よ。生き物は止まることなく再生する。彼らは生まれ、死ぬ、そしてまた生まれる。一度死んだなら、二度と生まれなくなるにはどう

したら良いのでしょう。この不可解な問いに解答をどうぞ与えて下さい」と。

このとき以来、男は非常に長い間考えに考えた。しかし、（それがどれほどか）年や月や日や時を数えることは出来なかった。当時には、それらは実在していなかった。仏の最高の智慧のお蔭で、この熟考は84,000劫も続いたと推定される。そののち、男は答えを見出して、女に言った：「おお、*Nang* よ。世界を創るべく、４要素（Dhātu）から、３つの性を作ろうではないか。女性と両性と男性とを」と。

Nang は、答えが正しいと思えて、黙していた。男は、彼女に近づき彼女を妻にした。両者は結び合い、以降一緒に暮らした。[ある日]*Pu Sangaiya Sangkasi* は、彼の妻に四種の物質を持って来た。みんな *Phakkat*（アブラナ：*Brassica juncea*）の種のように小さかった。*Nang Itthang Gaiya Sangkasi* は、これらの物質の２種類を取り上げて、４要素と汗と粘土を混ぜ合わせ、３体の人間の形をした像（Manussarūpa）を作った。[即ち] 女性と男性と両性具有である。彼女はこの像に念（Sati）を与えるため地の要素を入れ込み、力（Bala）を与えるために火の要素を、色（Vaṇṇa）を与えるために水の要素を、神通（Iddhi）を与えるために風の要素を入れた。続いて、彼女はそれらに美しいもの見るための眼を、心地よい音を聞くための耳を、芳しい香りを嗅ぐための鼻を、美味を味わうための舌を与えた。彼女はまた、触感を感ずるための身体を授け、３つの感受(Jāti-vedanā)、[即ち]触根(Phassa-āhāra)、受根(Vedanā-āhāra)、想根(Saññā-āhāra)の源を知るための感官（Mano-indriya）を与えた。すべてのものが所定の場に納められて、人間の像はそこに並べられた。そこで、意識状態がそれぞれに入り、霊魂に変じ、10ヶ月経って３種の生き物が生まれた。彼らが最初の３人の人間であった。

誕生して後、３人の人間はあらゆる種類の病気に罹り、一度たりとも快適ではなかった。[世界を創った] ２つの存在は、互いに話し合った。「人間たちは安息を見出し得ていない。私たちは、時を３つの季節に分けることにしよう」と。互いに相談し合った後、両者は３つの季節を設定した。[即ち] 寒い季節、暑い季節、雨の季節である。それより以来、３人の人間はあまり病気にならなくなったが、細く痩せていた。彼らは、両人からあらゆる種類の食べ物を与えられていたにも拘らず、丈高くも、大きくも、また頑強にもならなかった。ただ、米を食べたときだけ、彼らは大きく丈高くなり始めた。そのときより以降、

人間は食べ物に米を得て幸せとなった。

時は過ぎていった。両者は一緒に相談をした：「人間は年齢も事物の変転も知らず、疑惑を持っている。なぜなら、時というものが確定していないからだ。彼らは過去に、また未来に何が生ずるかを知らない。それは計測のための大切な基準を持っていないからだ。彼らのために、年や月や日や時間の基礎となる時の区分を作り出してやることが大切であろう」と。

［仏陀は続けられた］：おお、Koṇḍaññaよ。互いに相談し合った後、両者は、足の下が110,000由旬あるManosilāという名前の巨大な象を作った。象の身体はサファイアのように緑で、彼の脚はキャッアイのように白く、彼の牙はルビーのように赤く、彼の頭は金のように黄金色で、彼の歯は黒玉のように黒かった。火の要素から生まれた岩で作られており、象の食べ物は空気と水だけであった。

［仏陀は続けられた］：おお、Koṇḍaññaよ。両者は岩でスメール山を作った。象の背中に据え置かれたこの山は、440,000由旬の長さがあり、440,000由旬の幅があり、710,000由旬の高さがあった。埋もれた部分がまた710,000由旬あった。彼らはまた黄道十二宮を作り、同じくミジンコ（*Meng da: Lethocerus indicus*）のような形をした２つの機械装置（Yanta）を作った。彼らはまた27の月配置、［即ち］３乞食（Daḷiddo）、３大財物（Mahādhano）、３盗賊（Coro）、３国王（Bhūmipālo）、３嫌悪（Dessanti）、３女神（Devī）、３殺害（Bejjhaghāta）、３王（Rāja）、３沙門（Sāmaṇo）を設定した。これらの配置は黄道十二宮に配された。

その後、両者は、火炎の色を持つ鋼玉で太陽の宮殿を作り、それは太陽に眩い輝きを与え、１日に１つの割合で黄道十二宮に従い移動させた。太陽は、黄道十二宮を巡るのに１年の時を要することとなった。彼らはまた、銀色の鋼玉で月の宮殿を作り、*Fak hoy ngua*（？）の莢の形に似た四角の形を与えた。月は、２週間毎に太陽に近づきまた遠ざかる。その故に、十二宮の中の１つの星座から離れ、次の星座へ移動する。月は、太陽に近づくときその一面を見せ、遠ざかるときにその裏面を見せる。時計の16の始まりと終りが１日をなし、30日が１ヶ月となる。この時間の長さが十二宮の１つの星座から次の星座へ移動する時間となる。風の玉（Wind ball）のように、黄道十二宮は、異なる層をもって、スメール山を覆って、あたかも頭の上に据えられ互いに絡んで巻き付いた

螺旋の花の王冠のようであった。ユガンダラ(持双)山の上に、四大天(Cātummahārājikā)の4つの天界が置かれており、スメール山の最頂上には三十三の天界がある。

［仏陀は続けられた］：おお、Koṇḍaññaよ。［両人によって作られた］3人の人間は成長し、3人の子供を持った。女のItthīは、両性具有のNapuṃsakaに対するよりもはるかに男のPulliṅgaに愛着を見せた。2人が互いに優しく愛しているのを見て、両性具有のNapuṃsakaは、男を殺した。女は悲しみに打ちひしがれた。彼女は夫の身体を、とある場所に埋めて、墓地を示すためにJhalatuṅの木（*Mai Sa-Nghe*）を植えた。そして、亡骸が完全に朽ちてしまうまで、毎日食物を捧げた。その後しばらくして、両性具有の人間がまた死んだ。女はその身体を、とある場所に埋めて、再びその傍には決して近づかなかった。しかしながら、彼女の死んだ夫には米を捧げに通い続けた。3人の子供たちは、母親がそのようにしているのを見て、彼女に尋ねた：「おお、お母さん。どうしてあなたは最初に死んだお父さんには食べ物を持って行き、後で死んだお父さんには持って行かないのですか」と。母親は答えた：「最初のお方は、私のこころにとって愛しいお人です。私は彼を大変愛していました。しかしながら、2番目のお方は、私のこころにとって愛しいお人ではなく、愛着を抱いてはいません」と。それよりしばらくして、その女は亡くなった。3人の子供たちは、彼ら3人の親の身体を集め、墓地を作り、毎日欠かすことなく食べ物を捧げた。

親が死んだ後、3人の子供たちは、13人の係累を持った。女が6人、男が7人であった。最年長の子は、貰った動物のうち鼠以外とは遊ぶことを拒否した。母親が彼女の子供が動物に米を与えているのを見て、彼女はマガダ（Magadha）語で‘Mūsika-bhunja’という言葉を発した。北タイ(Tai)語では、“鼠が十分に食べた”という意味である。このことは、‘*Tao-chai*’という言葉で暦に記録された。牛とだけ遊んだ2番目の子は、‘*Pao*’と呼ばれた。虎とだけ遊んだ3番目の子は、‘*Yi*’と呼ばれた。兎とだけ遊んだ4番目の子は、‘*Hmao*’と呼ばれた。竜とだけ遊んだ5番目の子は、‘*Si*’と呼ばれた。蛇とだけ遊んだ6番目の子は、‘*Sai*’と呼ばれた。馬とだけ遊んだ7番目の子は、‘*Sa-Nga*’と呼ばれた。羊とだけ遊んだ8番目の子は、‘*Met*’と呼ばれた。猿とだけ遊んだ9番目の子は、‘*San*’と呼ばれた。鶏とだけ遊んだ10番目の子は、‘*Rao*’と呼ばれた。犬とだけ遊んだ11番目の子は、‘*Set*’と呼ばれた。象とだけ遊んだ12番目の子は、‘*Gai*’と呼ばれ

た。父親はこの子を‘*Gaja*’と呼ぶことを好んだ。母親は、象が子供を鼻で摑み、背中に乗せるのを見て、その子孫にマガダ語で‘Labhantigaja’という名前を付けた。北タイ語では、‘*Gai*’は象を意味し、暦で‘*Ka Gai*’が象の年に用いられる。13番目の子については、両親から貰った動物のうちで鼠以外とは遊ぶことを拒絶した。そのことが、彼が１番目の子と同じように、‘Mūsika’あるいは‘*Chai*’と呼ばれる理由である。母親が、子供の口から食べ物が落ちるのを見て、‘Huso-Musika’と言った。暦に従えば、‘*Kap-chai*’と言う言葉が用いられている。北タイ語では、それは“鼠の口から食べ物が落ちた”と言うことになる。

これをもって、Paṭhamamūlamūlī 第１章を終える。

第２章

〈帰依文〉

その時より以来、すべての生き物は同じ時期に健康で、また同じ時期に病気になり、その故に、誰も他のものを世話することが出来なかった。世界を作り上げた男と女であった *Nang Itthang Gaiya Sangkasi* と *Pu Sangaiya Sangkasi* は、お互いに相談し語り合った。「この世界はどうなっているのだろう？　あらゆることが同時に起ってしまう。生き物が死ぬと、全部が同時にそのようになる。これらの生き物たちでは、あらゆることが同一である。私たちは有害な惑星（Pāpagaha）を作ってこれらの生き物の運命に影響を与えることにしよう」と。互いにこのように相談して、これら生き物の各々の占星術のデータに応じて黄道帯の星宿に火の要素、水、風、鉱石、そして鉄の要素を配置し、次のように８つの惑星を配列した。[即ち]水星、木星、金星、土星、Rāhu-Ketu(註：８番目の星)、太陽、月、そして火星である。

[仏陀は続けられる]：おお、Koṇḍaññaよ。子供たちの母親であるItthīが、寿命が尽き死んだあと、夫のPulliṅgaは妻の身体を墓地に運び、*Thong puang* の木を植えて敷地を囲み、毎日食物を捧げた。しばらくして、両性具有のNapuṃsakaが次に亡くなった。Pulliṅgaはその身体を、とある場所に置いてその後何の世話もしなかった。子供たちは父親に尋ねた。「お父さん、最初に亡くなったお母さんには毎日お墓に食物を捧げている。だのに後で亡くなったお母さんには何もしていない。２人を同じに扱わないのはどうしてなの？」と。父

親は答えた。「おお、可愛い子供たちよ、最初に亡くなったお母さんは私のこころにとって愛しいが、次に死んだお母さんはそうではないのだ」と。

時は過ぎ、父親の Pulliṅga が死んだ。13人の子供たちは、仲良く互いに頼りあって生き続けた。そののち、20歳になった彼らの１人が病気になった。そのとき、誰もが薬もまた治療法も知らず、10歳または20歳まで誰が生き延びるかを語ることも出来なかった。誰かが病気になると、動物を放した。20歳の病人は、動物を放しているにもかかわらず治らなかった。牛を放したときだけ健康を取り戻した。33歳の他の病人は虎が放たれたときだけ治った。26歳の病人は蛇を放したときだけ治った。30歳の女性は鷲を放ったときだけ治った。また20歳の男性は象を放したときだけ治った。50歳の病人はライオンの王を放ったとき治った。あらゆる動物が、どういうわけか、これら病んだ人たちの帰依所であって、動物は人に治癒をもたらした。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。これらあらゆる生き物は同じ考えをもっていた。彼らが何かを為すときはいつもそれを同時に為した。彼らが食べるときは全員が同じ具合に食べた。そこで、彼らは何事においても不和となることもなくまた喧嘩することもなかった。彼らは多くの間違ったことを為し、誰もそれを止める者はいなかった。彼らは間断なく動物を殺して食物となし、何が善い行いで、何が悪い行いかも知らなかった。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。この大地を形作った２人は、生き物の為すことを見て、互いに相談して言った。「さあ、私たちはどうしたものでしょう？　彼らは、心を備えている動物たちを殺しつづけ、死んだあと、犯した大小の罪を地獄で償うことになるであろう。彼らは、自分自身がその苦しみの原因であり、間違ったことをして点けてしまった火が、彼らを間違いなく焼くのである。これは不変の法則である。未来に生まれる生き物たちも同じように行動し、同じ過ちを為し、同じように罪を受けるであろう。そうだ、彼らの１人ひとりが異なった心を持つようにしよう。１人は凶暴に、他は温順な心を持つように」と。お互いに相談して、２人は、人間や動物たち生き物の輪廻の有様を眺めてみた。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。世界を創った２人、*Nang Itthang Gaiya Sangkasi* と *Pu Sangaiya Sangkasi* は、そのとき、人間に再生した生き物は、最初に樹木の中に住むことに気がついた。［即ち］ココナッツの木、*Makn-*

ge（*Citrus nobilis*）の木、白と赤のカポックの木、*Pa peng* の木、バナナの木、マンゴの木、ジャックフルーツの木、*Go*（*Quercus kerrii*）の木、*Kraduk*（*Arytera litteralis*）の木である。これら有益な木が、人間たちの住む場所であった。昔、樹木に住むことがなかった生き物は、動物を除いて、人間の子宮に再生することはなかった。このことを知って、世界を創った２人は、地の要素、火の要素、風の要素、そして水の要素を、ココナッツの木、砂糖ヤシの木などの木々に１つずつ割り当てた。２人はまた、鉱物や鉄の要素をこれらの樹木に割り当てた、その中にはジャックフルーツの木や *Go*（*Quercus kerrii*）の木があった。

その時以来、生まれた人間たちは、もはや同じ性格を持つことがなく、各人は好むように行動した。喧嘩や闘争が発生し、すべての事柄に広まった。それより以来、人間は一緒に住むことが出来なくなり、人々は別れ別れとなって、ある者は村々に落ち着き、他の者は自らの好みの地に住んだ。時が過ぎ、人間の数は増え続けた。彼らの中には、ほとんど善い人は居らず、大方が悪い人であった。彼らは動物を殺して食物と為し、何が善いことで、何が悪いことかを知らなかった。彼らは死ぬと、地獄の苦しみを味わった。誰かがこのような世界を作ったのではない。間違ったことをした人だけが、そこに赴き、焼かれるのである。地獄は拘留の地ではない。自らの過ち以外には、誰もそこに留まる義務はない。誰か超人が、罪人を留めるため地獄を拵えたのではない。いやむしろ、備わった［心と身体の］感官（indriya）、［即ち］眼、耳、鼻、舌、身、意がそうするのである。これら６つの感官が、人々をして、日々に、自らの地獄を作らしめるのである。地獄に堕ちた生き物は、余りにも多く、もはや数えることは出来ない。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍaññaよ。その後、１人の息子がいる家があった。父親［そして母親］が亡くなったあと、子供は親族の者に追い出された。彼は寄る辺もなくどこにも幸せを見つけることが出来ず、森に出かけて *Tabec*（*Pinus merkusii*）の木の元に独りで住み着いた。食べ物を探すのに全力を尽くした。彼は両親のことをずっと考えていて、米も果実も芋も食べず終いであった。涙の流れる顔で、彼は、あたかも瞑想中の僧侶のように、木の下に座っていた。彼は邪魔する蚊や虻を殺すこともまた追い払うこともなく、何事にも不平を言うことは決してなかった。彼は、何が善い行いで、何が悪い行いか、また何が楽しみで、何が苦しみかを知ることなくそのようにしていた。彼の心

に宿っていた悲心（karunā）が彼に［悪い行為］を避けさせていた。もし、旅人がやって来て彼に出会うならば、彼は、その望むにしたがって何か食べ咬み砕くものを施すであろう。彼のところにやって来る、むかし食べ物として供された動物も、彼は捕えたり苛めることもなく、親と別れてしまった生き物の苦しみをずっと思い続けていた。彼が耐えていた苦しみが、彼を死に至らしめた。彼の模範的な行動が、彼を *Sakhien*（*Homalium grandiflorum?*）の木に住む樹神（Devaputta）に生まれ変えさせた。彼は、Paṭhamadevo と名付けられた。何故にというのは、彼が最初の天の子（Devaputta）［として再生した者］であったからである。

仏陀［Gotama］は、Koṇḍaññaのために、Paṭhamamūlamūlī の教説を与えられた。仏陀は言葉を進められた。「汝、賢者よ。これからの世に、この教説を知らしめるように」と。

そのときより、人間は地の果てまで広がり、もう数えることが不可能な数にまで達した。その中に、１人の女が居た。彼女に名前はなかった、というのもその当時、人間には言葉は備わっていなかった。彼女は、１人の盲目の男が住む家の程遠からぬ場所に暮らしていた。男は飲み水の貯えのためによく川に出向いていた。ある日のこと、盲目の男は道に迷って、のどの渇きを癒すことが出来なかった。彼を可哀そうに思って、女は道をきれいにし、道に沿って籐の手すりを作り、盲目の男が川までの道を失わないようにした。このようにして手に入れた功徳のお蔭で、彼女は、死んで後、*Yom hin*（*Chukrasia tabularis*）の木に住む女神として再生し、Mūladhītā と名付けられた。当時、人々は無意識に善いことや悪いことを為した。相応しくない行為を行った者は、地獄に行って焼かれ、一方、相応しい行為を行った者は報償を受けた。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍaññaよ。最初の劫（Kappa）は長く続き、まだ終わっていなかった。そのとき、*Nang Itthang Gaiya Sangkasi* と *Pu Sangaiya Sangkasi* は、互いに相談して次のように言った：「世界は長く存続してきた。火で滅すことにしよう。もし私たちがそうしなければ、死んでまた間断なく再生する生き物の数を知ることも、また為された高貴の行い（菩提資糧：Bodhisaṃbhāra）も知ることが出来なくなる」と。お互いに相談しあって、２人は梵天界に16天の階を設け、宝石の象 Manosilā の息を止めた。その間、世界を覆っていた雲は集まることを止め、もはや水を見出すことは出来なかった。雨

は降ることをやめ、太陽の宮殿はますます焦げ付くばかりになり、黄道帯の自宮に入った月の宮殿に火が点いた。回転に応じ、月の宮殿が惑星の宮殿に出会ったとき、月は惑星の宮殿を焼いた。次々に、すべての惑星の宮殿、木星の宮殿を含め、すべてに火が点いた。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。太陽の火によって放たれた熱は、大洋を干上がらせた。大地全部が焼かれ、炎は梵天界の極光天(Ābhassara)の階までに達した。火がすべてを焼き尽くした後、大地を創った２人は、宝石の象 Manosilā を再び呼吸させた。その間に、雲は集まり、10万倶胝の広がりをもつ鉄囲山の上に広がった。雨が降り始め、水は天の極光天（Ābhassara）の階にまで達した。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。水が極光天（Ābhassara）の階に達したとき、強い風が吹き、梵天界の天階［欲界］と大地を掃き、そしてそれらは再び元の通りになった。大地を風が乾かしたあと、梵天界に再生していた生き物たちが、再び地に下りてきた。おお、Koṇḍañña よ。滅した劫（Kappa）は、Tiravatthakappa と呼ばれた。すべての劫は生まれ、そしてこのように滅する。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。火が Tiravatthakappa を滅した後、次々に続いた劫は、数において１阿僧祇大劫であった。それらは、１つの Mahākathānakappa、５つの Padumakappa、３つの Puṇḍarikakappa、９つの Kumudakappa、８つの Uppalakappa、３つの Sogandhikakappa、１つの Ninnahutakappa、６倶胝と10万の Mahākappa があった。そして、Brahmakappa と呼ばれる劫（Kappa）が来た。天の子 Paṭhamadevo と女神 Devadhīta は亡くなって、これらのすべての劫に再生した。彼らは、ときに善いことを為し、ときに悪い行為を行った。彼らは滅多に天に行くことはなく、ほとんどの場合、地獄に堕ちた。事実、他の人間たちと同様に、彼らはしばしば動物に再生した。Brahmakappa のとき、天の子 Paṭhamadevo は、ある家族の内に生まれた。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。その子供は親族たちに混じって成長した。この生存の中で、彼は、“o o, e e”という言葉だけ発音できた。彼は、誰が親かを知らなかったし、夜と昼を弁えなかった。真っ直ぐな心を備えていて、彼は決して怒ることなく、傷つけるような言葉も言わなかった。彼に

は2つのことのみが意識にあった。［即ち］寒い季節と暑い季節であった。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。その子供は、年老いた者や彼の親たちを世話した。寒い季節には、彼は、彼らに薪を運び、火を拵えた。暑い季節には、彼は、彼らの沐浴のための水を運んだ。雨の季節には、彼は、彼らを避難させるための小屋を作った。彼はまた、人々が往来できるように道も作った。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。彼が手に入れた功徳のお蔭で、Paṭhamadevo は、死んで後、Indra と呼ばれる天の子として三十三天に再生した。秀でた美しさとサファイアの緑の身体を備え、彼は4人の天女に傅かれていた。彼、天の子は Brahmakappa すべてを輪廻し転生した。Brahmakappa は、2つの阿僧祇と6つの Mahākathānakappa、9つの Songandhikakappa、10の Avathakakappa、12の Ababakappa、8つの Ahahakappa、4つの Nirbbudaṅkappa、5つの Ambuddhakappa、7つの Koṭikappa が続いた。そして、Puṇṇasaṅkheyyakappa がやって来た。天の子 Indra は、そこでは少年に再生した。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。少年はようやく人間の言葉をしゃべり始めた。彼は、誰が親かを知り、自分自身を弁別し、誰々其が父親であると述べることが出来た。彼は、昼夜を分かち、善悪を語ることが出来たが、悟りを開くまでにはまだ達していなかった。彼は、無意味な行為、例えば生き物を殺すこと、他に属するものを盗むこと、偽りの言葉を言うことや、酔っ払う飲み物を摂ることはしなかった。彼は森に出かけて独りで暮らした。亡くなったとき、彼は梵天界に再生して、Mahāparisuddhabrahma と呼ばれた。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。［Puṇṇasaṅkheyyakappa］は、4つの Asaṇkheyyakappa、9つの Kathānakappa、10の Padumakappa、5つの Ambuddhakappa、16の Akkhobheṇikappa、2つの Ninnahutakappa、7つの Dhikakappa、10万の Mahākappa が続いた。そして、Uttamakappa がやって来た。第5番目の天階から降りてきて、Mūradhītā は、とある家に少女として生まれた。彼女の美しさは比べるものがなかった。Mahāparisuddhabrahma は、再びある家に少年として生まれ、またも秀でた美しさを備えていた。2人は夫と妻になった。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。両人は、2人の子供を持った。

年長の少年は、Paṭhamasikka と名付けられた。年少の少女は、Mūlapubbā という名前が付けられた。当時、人間は語ることを知っていたが、善と悪をまだ区別することは出来なかった。両親と２人の子供は、共に何が善い行いで、何が悪い行いかを知らなかった。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍaññaよ。２人の子供が成長して後、もう世俗の生活を営むことを望まない両親は、彼らを残して、森に隠棲し、互いに独りとなって隠遁者となった。彼らは、‘Buddho’から始める瞑想（慈の修習：Mettā-bhāvanā）はまだ行っていない。なぜなら、当時、［言葉としての］‘Buddho’は存在していなかったからである。彼らは瞑想を始めるための他の言葉を見つけることは出来なかった。［彼らの森での閑居］は、貪欲や渇愛からの回避が行じられるのみであった。彼らは亡くなって、梵天界に再生した。男と女はUttamakappaのすべてで輪廻転生を続けた。Uttamakappaは、３つのAsaṇkheyyakappa、24のMahākathānakappa、２つのPadumakappa、５つのAṭṭhakappa、９つのBindhukappa、60のAkkhobheṇikappa、１つのNinnahutakappa、90のKoṭikappa、10万のMahākappaが続いた。この劫の間、Mūradhītāは結婚して、２人の子供を得た。彼女の夫の死後、彼女は子供たちと一緒に暮らした。年長の少女はPubbāmūsikaと呼ばれた。そして年少の少年は、Paṭhamajotiと呼ばれた。前世で彼女の夫であったPaṭhamadevoは、このMūladhikakappaの時、ある家族に再生した。彼は、母親の胎宮から出るや否や両親に語りかけた。この並外れた現象に驚愕して、親族は彼にPaccekabuddhaという名前を与えた。７歳のとき、この子はもはや世俗の生活を続けることを望まず、その後、貪欲と渇愛に何らの愛着を感じなかった。彼は、静謐な場所に独り暮らし続け、８年の間、物事の常ならざることを、そして間違ったことを行う怖れについて考えることを止めなかった。彼は、阿羅漢の位に達し、過ごした数え切れない前世までの生活を眺め、悟りに達した。開悟により、以後、過去と未来を知ることが出来た。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍaññaよ。Paccekabuddhaは、ある日、川に水浴びに出かけた。泥棒が彼の黄色い衣（Cīvara）を奪った。衣を泥棒に奪われた聖者は過去に起った出来事を思い出し、前世で彼の妻であったMūradhītāを眺めた。彼はその時自分に言った：「私は家族に衣を布施するよう頼むことが出来ようが、しかし彼女は十分な量の功徳を積んでいないため、

果報をすぐに積み上げることは出来ない。もし、Mūradhītā が施しをなすならば、彼女はあらゆる感性に訴える存在（欲有：Kāma-bhava）を嫌悪し、存在の形成（Saṅkhāra-dhamma）の無常（Anicca）に気が付くであろう。功徳の果報（Phala-ānisaṃsa）が彼女に成就するであろう。

このように考えて、Paccekabuddha は女に近づいた。彼女は喪に服し、顔を伏せ、自分に近づく彼を見ることはなかった。彼は尋ねた。「おお、貴女よ。何故泣いているのか、何が起ったのか？」と。「おお、尊者さま。私の愛する夫が亡くなりました。私は非常に苦痛なのです」「そなた、嘆くではない、そのように泣くではない。そなたの夫はもはやそなたのことを思ってはいない。彼は、蟹となって、池で妻と暮らしている。彼はそなたの10万倍も幸せでいる」「おお、尊者さま。それは本当ですか。私を夫のところへ連れて行ってください」と。Paccekabuddha は、女を蟹のところへ連れて行った。彼女は蟹に言った。「おお、愛するご主人さま。あなたは私を大変な悲しみに残しておいでです。帰ってきて、私と暮らしてください」と。彼女が蟹を掴むと、蟹は彼女の指を挟んで叫んだ。「酷いことを！何故に私を捕まえるのか」と。悲しみの涙を流して、寡婦の女は Paccekabuddha に言った。「おお、尊者さま。私の帰依所となってください」と。開悟の人は、蟹に命じて言った。「女の指を離してやりなさい」と。そこで、蟹は女の手を自由にしてやった。非常に驚いたことに、女は両手を合わせ、額の上に掲げ、Paccekabuddha を賛嘆して述べた。「おお、尊者さま。あなた様は私の帰依所です。この世界で最も高貴なお方、あなた様を賛嘆いたします。あなた様は、私が盲しいていた暗闇を取り除き、物事の無常を見えるようにして下さいました」と。女は、聖なる人の足元に身を投げ、黄色い衣を捧げ、次の願いを為した：「あなたのような聖者に、私もならせて下さい」と。Paccekabuddha は、女の今をよく考えて、そして述べた。「おお、貴女よ。まさに今そなたが表明した願いは、そなたの心の祈りに応じて、すぐに真実となるであろう」と。彼女は施しの物を捧げ、家に戻って行った。ずっと道すがら、彼女は夫のことと、存在の無常なることを思い続け、自分に向かって言った：「私の夫は亡くなった。彼はそのことで消え失せたわけではない。彼は蟹に再び生れたのだから。このような状態で人間に再生することは、彼にとっては難しいことなのであろう。[今まさに生起したこと]は、実に不思議なことである。私に何が起ろうとしているのであろうか？」と。このように考え

たとき、すべての彼女の女性たる特質が消失した。彼女は男性となり、Paccekabuddha となった。

ここに、Paṭhamamūlamūlī 第２章が終わりとなった。

第３章

〈帰依文〉

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。２人の子供が、仕事を終えて家に帰ると、母親がいないことが分かった。彼らは心から泣き叫んだ。子供たちの母親であった Paccekabuddha は、そのとき、自分に言った：「もし私が赴いて彼らに会えば、子供たちの悲しみはいや増すであろう。彼らの嘆きが和らぐまで待って、そして会いに行こう」と。このように考えて、Paccekabuddha は、彼の子供たちのところを訪れることはしなかった。彼らの悲しみが幾ばくか消え去ったとき、子供たちは互いに相談した：「私たちの両親はもうここには居ない。この場所に留まるべきではない。私たちが幸せに暮らすことが出来る場所を行って探そう」と。互いに相談し合って、２人の子供たちは歩き出し、３由旬の幅のとある川に到着した。彼らはそこに立ち止まって、眺めてみた。川の対岸には、転輪聖王の壮麗な宮殿があり、その頂きにはきらきら輝く宝石が見えた。彼らは人に訊ねてみた：「あの宝石は何という名前ですか」「転輪聖王宮の頂の宝石と呼びます」「私たちは転輪聖王にお会いしたく思います。私達を彼のところに連れて行ってください」「この宮殿は人によって造られたものではありません、ひとりでにそこに現れたのです。*Phi soea* と Yakkha によって守護されています。誰も一切何も知らないのです。将来、転輪聖王が出現したとき、この宮殿が彼の居処となるのです。お話したことは、私たちに昔から伝えられています。誰も一切何も見ていないのです」と。子供たちはそこに留まり、そこに彼らの家を作った。

ある日、満月が輝きを増し、清浄で美しくなった頃、２人の子供のかつて母親であった Paccekabuddha は、自らに告げた：「私の子供たちにいたわりを示してあげる時がきた」と。その朝、Paccekabuddha は、子供たちのところへ会いに行き、子供たちは彼に食物と衣を布施として捧げた。開悟の人はそれを納めて、この祝福の言葉を述べた：「あなたのすべての望みが完全に実現するように、あたかも光を増してゆく満月のように、また魔法の石であるマニ宝珠、

そして転輪聖王の戦車のように」と。Paccekabuddha が去った後、２人の子供の前にはあらゆる種類の宝物が出現した。真夜中となったとき、天の神々、精霊、夜叉（Yakkha）が彼らを連れ出し、彼らを転輪聖王の位に就けて崇めた。そして彼らはすべての大陸を支配した。そのときより、Paccekabuddha は、１劫（Kappa）あたり、１・２人出現した。Paccekabuddha は、ある劫では１人も現れず、一方、他の劫では、百千の Paccekabuddha が出現した。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。60阿僧祇と２万大劫(Mahākappa)が過ぎて、Uppalakappa と呼ばれる劫が来た。そのとき、875,000倶胝(koṭi)の Paccekabuddha のために供養をした男が、この劫に、長者(Seṭṭhi)の息子として誕生した。彼は母親の子宮から足を先にして出てきたので、身内から Pādanikkhama（足から出た）と名付けられた。彼は10万大劫間の前生を思い出して、自らに言った：「数え切れない回数、私は王であったり、惨めな人間であったり、男奴隷であったり、大小の動物であった。今生が終わったとき、私は善悪どちらの境遇に再生するか分からない。人間界の富裕、それらが10万年続こうとも、天界の１日で楽しむ幸せになお値しない。人間界の苦悩、それらが10万年続こうとも、地獄の一瞬間よりなお軽い。真実、地獄で続く苦しみは、あまりにも酷く、とても言葉に書き表すことは出来ない。もし、たった１つだけの誤りを犯しても、無限の苦しみに人は耐えることとなる。私は、自身、いま幸せで、次のいま不幸であったりする。永遠の幸せを成就するため私は何をすべきなのだろうか？」と。彼はしばしばこの質問を自分に繰り返した。

そのとき、Paccekabuddha が、朝の托鉢に町へやって来た。彼の両親は、聖なる人に食物を与えた。彼は思った：「前生で、私は施物として食物、衣、金や銀、牛や水牛、男女の奴隷など、様々を数多く施した。私はそれでも、永続する幸せを見出せなかった。さて今は、Paccekabuddha に供養をしよう」と。このように考えて、彼は、妻と子供を乞う者に与え、Paccekabuddha への布施と供養（Pūjādāna）に資するため自らを火中に投じた。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。彼の火による生贄があって後、８阿僧祇が過ぎた。そして、Caṅkarakappa と呼ばれる劫が来た。Pādanikkhama は、大変に沢山の回数、供犠として自分の命を絶ち、60倶胝（koṭi）の Paccekabuddha に品物を布施して、Niddāmātika という名前の婆羅門の息子に再生した。彼が誕生するとき、母親は健やかに眠っていた。その故に、子供

はNiddāmātika(眠る母)と呼ばれることとなった。子供は、彼の無数の前生を思い起こし、自分が決して１つの生存においてすらも、幸せには出会っていないことに気が付いた。何が理由なのか？　実に、人間にあっては、すべてが苦しみ（Dukkha）となる。[即ち] 他人に優れていようと劣っていようと、富裕であろうと貧窮であろうと、美麗であろうと醜悪であろうと、学があろうと無かろうと、食べることに満ちていようと困っていようと、眠れようと不眠であろうと、健康であろうと病気であろうと、そうなのである。すべてのこれらの苦しみも、４つの下方世界（苦界：Apāya）よりは軽い。苦しみは、人が他よりは、秀で、豊かで、美しく、より学があれば、軽い。ちょうど、ある人は十分に食べるが他の人は十分に食べることがない。ある人は眠れるが他の人は一睡も出来ない。ある人は健康であるが他の人は病気である。他よりも秀で豊かである人々は幸せを味わっていると言えよう。しかし本当のところ、この幸せは、「健やかに食べる」「安らかに眠る」ということと同じではない。何ものも人から幸せを奪い取ることは出来ない。他のすべてに勝るもの、それは幸せである。そこで、人々は考える：「他に秀で豊かであるために、またあらゆる生存で健やかに食べ安らかに眠るために、私は何をすべきなのか？」と。私は、私自身は、人の中に不変なるものが見出せないという１つの理由から幸せを求めているのではない。ある者は、人間に再生して幸せにしている。他の者たちは、無間地獄に堕ちて苦しんでいる。事実、人間の世界の苦しみは、地獄で耐える苦しみよりはるかに軽い。餓鬼(Peta)、阿修羅(Asura)、畜生、これら３つの下方世界は、すでに苦受（Dukkha-vedanā）である。しかし、この苦しみは、地獄界の苦しみよりは軽い。地獄界は、下方世界で最悪である。どこからこの４つの世界はやって来るのであろう。誰かが造ったのであろうか？　誰もそれを造った者はいない。ただ、六処（Āyatana）、[即ち] 眼、耳、鼻、舌、身、意に起因する1,500の“煩悩（Kilesa）”と“渇愛（Taṇhā）”が生み出すのである。これら六処が、日々、そして毎瞬間、生き物の中に住する地獄の原因なのである。このように考えて、男は自らに言った：「私は、どの感官の１つにも関り合ってはいけない。私は、幸せに到達するために、貪欲（Rāga）、瞋恚（Dosa）、愚痴（Moha）、慢心（Māna）、謬見（Diṭṭhi）から離れていよう」と。このように思って、男は、財産、妻、子供を捨て、深い森に向かった。そして、寿命の尽きるまで、髪毛（身体）の如きものの脆さ•壊れやすさについて考え続けることを止

めなかった。死んで後、彼は梵天界に再生した。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍaññaよ。Caṅkarakappaは、40阿僧祇と10万大劫の間、続いた。そして、Nīlavattakappaが来た。Niddāmātikaは、Vuḍḍhibhūtakumāraという名前の王の息子として再生した。誕生のとき、あらゆる種類の品物、金銀、宝石、宝珠が大量に出現した。強力で富み栄えていた王国は、閻浮提の大小すべての国々の王子が訪れ、敬意を表し貢物を捧げた。その故に、彼の父親は、彼にVuḍḍhibhūtakumāra(繁栄する童子)という名前を付けた。王は、息子を大変可愛がり、16,000の乳母に世話をさせ、その上、Utarakho大陸からきた4,000人と、Kelāsa山からきた6,000人と、竜（Nāga）の世界からきた1,000人と、そして外国の王や王子からの贈られた6,000人の乳母が傅いた。乳母たちは、彼の便や尿をきれいにした。幼い子は自分に言った：「無数の生存の中で、私は苦しみを味わってきた」と。このように考えて、彼は、父親に乳母たちを自分の国に送り返すように頼んだ。乳母たちは帰ることを拒んだだけでなく、その数は増え続けた。子供はそこで思った：「この生存で、私は幸せを見出すことは出来ないであろう。もしこのようなことが続くならば、将来、もっと大きな苦しみに出会うであろう。生きている限り、私は自分の決心を固く守ろう」と。

このように決意して、彼は食事することを拒んだ。乳母たちは彼に訊ねた：「おお、尊いお方。どうして食事を拒まれるのですか？」「私は戒を守るのだ」「そのようにお守りになって何を得ようとなさるのですか？」「生まれて以来、私は幸せを見出せないでいる。このように行為するのは、未来に期待してのことなのだ」「おお、尊いお方。あなた様がお生まれになってより60,000歳になられます。あなた様は、ご自分で納得して、一椀の米も召し上がっておられません。どうして苦しんでいると仰るのですか？」「おお、女たちよ。お前たちが考えている幸せは、本当の幸せではない。戒を守る利得により、お前たちは次の生存において、百倍、千倍、万倍、十万倍も大きい幸せを経験するであろう」と。そのとき、乳母たちは言った：「生まれた生き物は、とりわけ幸せを望みます。私たちもまた戒を守りましょう」と。このように述べて、いろいろな場所からやって来た乳母たちは、戒を守ることを始めて、死後、天界たる神の世界（Devaloka）に再生した。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍaññaよ。Nīlavattakappaは、16阿僧祇

と10万大劫の間、続いた。次に、Sunandakappa という名前の劫がやって来た。当時、人間の寿命は100万歳であった。Vuḍḍhibhūtakumāra は、この劫に、とある婆羅門の息子として再生した。彼が誕生したとき、敵対していた者たちは、突然互いに仲良くなった。大地のいずこにおいても、隣人に敵意を持つ者は１人もいなかった。その故に、彼の両親は、彼に Visuddhamittakumāra（清浄な友人の童子）という名前を付けた。

彼が生まれたとき、彼は心に思った：「もし私が乳を飲めば、それは便や尿になるだろう。それは苦しみであり、私の業（Kamma）に障りとなる。乳を飲まないことにしよう」と。母親は彼に訊ねた：「おお、可愛い坊や。乳を飲まないのはどうしてなの？」「お母さん。もし私が乳を飲むとそれは汚物となり、お母さん、親はそれを洗わなければならないでしょう。それは私の業を汚す落度であり、私が涅槃の幸せを成就することの妨げとなります」「おお、可愛い坊や。それは一体どんな幸せなのですか？」「おお、お母様。幸や不幸、欲求し、また食事することは、生死するものの定めです。もし働くことがあなたに苦しみを齎すなら、誰か他人にそれをさせることが出来ましょう。しかし、若さや老いは互いに交換することは出来ません。涅槃の幸せは、抑制に服することではありません。それは最高の幸せです。終わりを知らない輪廻転生において、金銀の財産を持つことは苦しみを生む。なぜならそれらを守らなければならいから；貧困は苦しみを生む。そこは、欲するものを得るために困苦があり、財を求めて走り回る；知識があることは苦しみを生む。教育の無い者に教えなければならないから；教育の無いことは苦しみを生む。それは何事にも無知であるから；美しい姿であることは苦しみを生む。それは嫉妬の的であるから；醜いことは苦しみを生む。それは悪意ある陰口の種となる。これらすべての理由から、私は輪廻転生に留まる必要をもはや感じない。だから、乳を飲まないのです」と。この子供の宣言を聞き終わって、１万の世界に住む神々（Devatā）は、集まって相談した：「Visuddhamittakumāra は乳を飲むことを拒んだ。どのようにして生き延びて行くのだろうか？　間違いなく彼は死ぬだろう。私たちは、この貴重な存在を死なせてはならない」と。

神々は互いに相談し合って、子供に天の乳を与えることにした。その後、子供は成育して行った。16歳のとき、Visuddhamittakumāra は世俗の生活を断って、死するまで、修習（Bhāvanā）と内観（Vipassanā）に身を投じた。それでも

なお、彼は一切智（Sabbaññū）に達することはなかった。彼は地上の生存を終え、亡くなった。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。Sunandakappa は、8阿僧祇大劫の間、続いた。そして、Suvaṇṇakappa という名前の劫が来た。そこでは、人間の寿命が1阿僧祇から100万年に短くなった。Visuddhamittakumāra は、長者（Seṭṭhi）の息子に生まれ変わった。男や女の中で、中風や猫背の病気の者は、子供に触れたり腕に抱いたりすると忽ち病気が治った。その故に、身内の者たちは新しく生まれた子供に Arogayakumāra（無病の童子）という名前を付けた。遠くの王国からやって来た人々は、その少年を世話することを申し出た。その結果、少年は両親を100年毎に一度だけしか訪ねることが出来なかった。彼が成人に達したとき、Arogayakumāra は両親の元を去って、苦行の生活に入った。当時、閻浮提のすべての陸地は、町や村で溢れていた。彼は静謐な場所を見つけることが出来ず、世俗の生活に戻ってきた。彼は、戒を守り、100万年生きて、亡くなった。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。Suvaṇṇakappa は、4阿僧祇と10万大劫の間、続いた。次いで、Padumasarakappa という名前の最後の劫が来た。そこでは、人間は10万年まで生きた。偉大なる人（Mahāpurisa）、［即ち］Arogayakumāra は、ある王の息子に生まれ変わった。彼が生まれた日、すべての生き物が人間の言葉を話し、木や、草や、つる草や、実に鉢や、梯子や、壺や水差しまでが話すことを知っていた。人々は、植物に話しかけ、彼らは答えた。人々が話しかけなければ、植物も同じように話さなかった。このことすべては、仏の波羅蜜（Pāramī）のお蔭であった。その故に、Tiricchānadhammavara という名前が子供に付けられた。

4,500歳のとき、彼は世俗の生活、妻、子供たちを捨てて、遊行の苦行者となった。彼は、次のような木の根元で、瞑想と内観に励んだ。［即ち］それは、Jelapa（*Mai Tin pet: Asltonia scholaris*）と、Kiṃsuko（*Mai Kuao: Butea frondosa*）と、Pāṭalī（*Mai Ge foy: Stereospermum bignoniaceae*）と、Pipphalī（*Mai Lang: Ficus lacor*）と、Sāla（*Mai Rang: Shorea siamensis*）と、Nāva（*Mai Nao kan: Calophyllum inophyllum*）と、Ajjuno（*Mai Jalo: Pentapatera arjuna*）と、Asoka（*Mai Kasalong: Millingtonia hortensis*）と、Mahāsoka（*Mai Deungka?: Jenesia asoka?*）と、Mahānibba（*Mai Asok lap moeun: Thaipingensis cantley?*）と、Piyaṅgu（*Mai Gayom: Shorea*

florinbunda）と、Veḷuvana（*the bamboo tree*）と、Campa（*Frangipani*）と、Bimba（*Mai Ruak fa: Terminalia alata*）と、Padumapiya（*Nauclea camba?, Mai Kannika: Pterospermum accrifolium*）と、Assakaṇṇa（?）（*Mai Du: Pterocarpus macrocarpus*）と、Amela（?）（*Mai Kham pom: Phyllantus emblica*）と、Puṇḍari（the mango *Kaso* tree）と、Siriso（*Mai Prachik: Acacia sirisa*）と、Udumbara（*Mai Dua klieng: Ficus glomerata*）と、Nigrodha（the Banyan tree）と、Assaṭṭha（*Mai pa pang: Ficus religiosa*）と、Vāsanā（*Mai Bunn: Mesua ferrea*）と、Sesa（*Mai Yom hin: Chukrasia tabularis*）と、Rājāyatana（the fly-mango tree: *Buchania glabra*）である。彼は、これら25の木の根元で心の修行を行じたのであり、彼は各々の木の下で200年間を過ごし、合せて5,000年となった。ついに、Rājāyatana の木の下で一切智に達し、仏となり、宝座に着いたのであった。その時、彼は無数の前生を思い起こしていた。まさにその時、帝釈天、梵天、天の子たち(Devaputta)、そして神々（Devatā）は、光輪が仏を囲み、光は１万の世界（鉄囲山：Cakkavāḷa）を照らしているのを見た。

このように美しく不思議な有様をかつて見たことがなかったので、神々は仏の側に近づき、挨拶して訊ねた：「無量の功徳を備えた尊者よ。名前はなんと仰るのですか？」と。仏は答えられた：「私は、あらゆる苦悩から永遠に解き放たれた存在である。私の名前は、一切智者（Sabbaññūsattha）である」と。そのとき、神々は歓喜し、両手を掲げ、最上の人・最高の人・完全に目覚めた人を礼拝し、叫んだ：「おお、尊者様。どうぞ私たちの師となって下さい。そして、私達に苦悩の滅への道を示してください」と。

仏は思った：「どのように私は、法の教え（Dhammadesanā）を世界に示すべきであろうか？　過去の出来事を話す以外に他の説法をすることは相応しくないであろう」と。このように考えて、仏陀は、Paṭhamamūlamūlī の説法をすることを選んだ。それは世界を創った２人、[即ち]Nang Itthang Gaiya Sangkasi と Pu Sangaiya Sangkasi に関する説法であった。仏は、まず Dhammacakkappavattana Sutta（初転法輪経）の説教から始めて、次に Paṭhamamūlamūlī（始源の物語）に及ばれた。梵天、帝釈天、神々、そして101の言語を喋る人間たちは、仏の周りにいて、仏の教説の一滴たりとも理解することはなかった。なぜならば、いまだかつて仏は存在していなかったからである。これらの者たちは、十分な功徳を積み上げていなかったので、聖なる人の教説を理解するには

至らなかった。彼らはきわめて凡なる者たちであり、その故に、法（Dhamma）を消化することは出来なかった。

仏は思った：「実に、法を聴く習慣はまだ出来ていないのだ。私は文字(Akkhararūpa)を作って、彼らの目に示し、彼らに教えることにしよう。アルファベットに何を選ぼうか？　生き物が気分に従って発する音以外を基本にするのは不適当であろう」と。「生き物が誕生するとき、彼らは、これら a, i, u, e, o の5音を発する。気分の悪いときには、彼らは長い音、ā, ī, ū, e, o と発声する。口が大きく開いたとき、また瞬間の気分により、i または ī という音は、e という音に変化する。u または ū の音は、o に変わる。口を閉じたとき、e の音は、i または ī に変化する。o の音は、u または ū に変わる。これらすべての音は母音を形成する。しかしまた、k, kh, g, gh, ṅ; c, ch, j, jh, ñ; ṭ, ṭh, ḍ, ḍh, ṇ; t, th, d, dh, n; p ph, b, bh, m; y, r, l; v, s; h, ḷ, ṃ は子音である。子音は母音と結合して3つの性を持つ単語を形作る。[即ち]女性、男性、中性である。性は、[単語] 終末の母音によっても決定される。無知の者には理解することが困難であるから、私はこれらのすべての規則を書き下して、彼らがより良く分かるようにしよう。何を目印としたものだろうか？」と。

このように考えて、仏は世界を眺め、過ぎた時、1人の女が夫の墓のある場所でJha-la-tuṅ（或いは *Mai Jhame?*）の木（の杭）で仕切りを作っているのに目を止めた。聖なる人は、そこで、[終末母音に]i と ī があるものは男性と決めることにした。母音 i と ī が子音 jh と結合するものは男性と決定した。母音 u と ū に子音 l が結合したものは男性とした。母音 i と ī に子音 p が結合したものは女性と決めた。母音 ā に子音 gh が結合したものは女性とした。宝石の鉛筆で、仏は起点（Bindu）、即ち［母音］a を石板に描き始め、101の言語を喋る人々に、各々それぞれの言語で「さあ、お前たち。母音を書きなさい」と言って、石板を手渡した。「おお、尊師よ。指導するお方。どのように書かねばいけませんか？」「a から始めなさい」「どのように書かねばいけませんか？」。仏陀は沈黙を守られた。

まさにその瞬間、その場所の守護神 Surinda は、仏に挨拶して言った：「おお、無量の功徳に満ち溢れる指導の尊師。どうか私どもに大なる憐れみ(Mahākaruṇā）を示して下さい。昔、子供たちが Pa-gha（*Mai Kluang: Pometia exima?*）の木を植えて、母親の墓所の印としました。'ā-la-pa-na' で、3つの性が表現さ

れる。子音 k は、子供たちが親の墓所を区分けするためビンロウ樹の葉を切ってより以来、存在する。3つの性は、それぞれ名前を持つ。名前［それ自身］は語根（Dhātu）がある。性は、格変化（Vibhatti）と接辞（Paccaya）が加わらねばならない。単語は、挿入子音で組み上ったときに意味を持つ（Āgama）。地上に生まれた生き物は、その初めに意識（Citta-viññāṇa）を授かる。おお、尊師よ。どうか師の加持（Adhiṭṭhāna）を101の石版と鉛筆に集め、生き物に教えをいただき、その結果彼らが苦しみ（Dukkha）から解放され、楽しみ（Sukha）を得るようにして下さい」と。

仏は、しばらく沈黙を守られ、加持（Adhiṭṭhāna）を101枚の石版と鉛筆に集めて、言われた：「好きなように（Ajjhāsaya）、文字を書きなさい」と。彼らは仏の指示に従って、任意に母音を a から o まで書いた。仏は続けられた：「さあ、子音を書きなさい」と。彼らは、そこで仏が与えた起点（Bindu）から始めて、k, kh, g, gh, ṅ, から s, h, ḷ までを書いた。101人が書いた文字は互いに似てはいなかった。なぜなら、各人は自分自身の言語の必要に応じてそれら文字を描いたからである。唯一 “a” だけがすべての言語に共通であった。人々は、そこで、101の種類の書き方で仏の教説を記録し、それは三蔵（Tripiṭaka）としてまとめられた。101の種類の書き方を開始した人々は阿羅漢の位に達した。仏の周りでその教説を聴いていた、きわめて多数の人たちは、各々の功徳に応じて、阿羅漢の位に至る4つの道（それぞれ）に達した。［即ち］預流者（Sotāpana）、一来者（Sakadāgāmī）、不還来者（Anāgāmī）、そして阿羅漢道（Arahattamagga）である。

［仏陀は続けられる］：おお、Koṇḍañña よ。仏は、人々や神々に教えを説き続け、彼らが永遠の涅槃に入ることを手助け、その数は24阿僧祇、10万と60倶胝（koṭi）になった。大地を創った2人、［即ち］*Pu Sangaiya Sangkasi* と *Nang Itthang Gaiya Sangkasi* は、歓喜した。女は夫に言った：「ご主人、あなたは大変な智慧を手に入れられました。あなたこそ私の夫に相応しい人です」と。

ときに、友達である3人の男が仏を眺めた。比べるものなき美しい聖なる人は、光の雲の中で輝いておられた。彼らは次の願いを表明した：「おお、尊者様。私たちも、あなたのように仏となりたい」と。聖なる人は答えられた：「如来（Tathāgata）の像を作りなさい。それは神々や人々の尊崇の的となるであろう」と。

3人の男たちは互いに相談し合った：「どのように仏の像を作ればよいのであろうか？」。1人が言った：「思うに、もし何か美麗なものを望むとしたら、多くの時間が掛かるだろう。何か智慧（Paññā）を出して早く仕上げよう」と。他の1人が言った：「私の考えでは、もし本当に立派なものを目的とするならば、非常に時間が長く掛かるであろう。信(Saddhā)によって、遅くも早くもない通常の時間で仕上げよう」と。最後の1人が言った：「私の考えでは、何か崇高なものを作ろう。必要な時間をかけて、私たちの精進（Viriya）を示そう。仏にそっくりにしよう、よし時間が掛かろうとも。多くの努力・精進をすることはこのような仕事に相応しいことだ」と。しかし、意見を一致させることが出来ず、3人の男たちは、互いに思うように自分の仕事を始めた。その時、未来に誕生する仏の芽（Buddhaṅkura）が、3つの家族に属するという授記があった。[即ち] 最初の家族はPaññādhikaと呼ばれ、2番目はSaddhādhikaと呼ばれ、3番目はViriyādhikaと呼ばれると。Paññādhikaの家族の仏の芽たちが仏になることを望んだその瞬間から、彼らは菩提の種（Bodhisambhāra）を行じて、4阿僧祇と10万大劫の間に及び、ついに仏の位に達した。Saddhādhikaの家族の仏の芽たちが仏になることを望んだその瞬間から、彼らは菩提の種(Bodhisambhāra）を行じて、8阿僧祇と10万大劫の間に及び、ついに仏の位に達した。Viriyādhikaの家族の仏の芽たちが仏になることを望んだその瞬間から、彼らは菩提の種（Bodhisambhāra）を行じて、16阿僧祇と10万大劫の間に及び、ついに仏の位に達した。彼らの哀愍の心により、これら仏の3家族は、人々を手助けして、合わせて24阿僧祇と10万倶胝（koṭi）の人々を涅槃に到達させた。

[仏陀Gotamaは続けられる]：おお、Koṇḍaññaよ。仏が10万歳になられて、涅槃に入られようとされたとき、生き物たちは、人々および神々の帰依所となって下さることを仏にお願いした。聖なる人は、教法、[即ち] 仏（仏像：Buddharūpa)、法（Dhamma)、僧（Saṅgha）を樹立され、5年間（＊写経生の誤りか。5,000年？)、人々と神々のための尊崇の対象とされた。また仏は次のような説示（Ovāda）をなされた：「仏を尊崇する者は、まことに秀でた者として再生するであろう。法を尊崇する者は、智慧溢れる者として再生するであろう。僧を尊崇する者は、富裕の身となって再生するであろう」と。Tikkhadhammaと呼ばれた気高く完全に悟れる仏は、人々を手助けして、24阿僧祇と10万倶胝（koṭi）の人々に涅槃を得させた。

［仏陀 Gotama は続けられる］：おお、Koṇḍaññaよ。時の起源に関するこの物語（因）（Uppatti-nidāna）は、すべての仏によって次々と語られた。過去、Anomadassī 仏の世に僧となった Mahā Kaccāyana は、まことにかくも有名な伝承の中にいた。その故に、Gotama 仏陀の世に、彼はそれを教え、（単語の）性、格変化、接辞、挿入子音の使い方を解説したのである。かくして、母音 a は ā と変化することができる。母音 u は o に、母音 i は e に変化することができる。そしてまた jh や l や gh のような子音があるのである。

僧 Koṇḍaññaは、仏陀 Gotama の説法を聞き終って幸せであった。彼は、聖なる人の前にひれ伏して、五体を投地し、暇を乞い、自分の僧院へと戻った。四部衆の人々は、その前生で得た功徳に応じて、それぞれに、高貴の法(Dhamma）たる［4つの］聖者の位、［即ち］預流者（Sotāpanna)、一来者（Sakadāgāmī)、不還来者（Anāgāmī)、そして阿羅漢（Arahant）に達した。

ここに、Paṭhamamūlamūlī の第3章を終わる。